

## 「二十五年の日中交流をふりかえる」

莫 邦 富

小島先生の基調報告の中でも、日本に来た留學生たちがなぜ反日家として中国に戻ってしまったのかという問題提起がありました。まず、私の日本語学習歴を考えてみますと、一九七二年に中国と日本が国交正常化された後で、二十四年になります。日中の国交が正

常化された時は、私はちょうど農村に追いやられていて、野良仕事をしていたのですが、当時は詩が好きでいろいろ書いて発表、一応デビューしていたのです。たまたま上海に一時帰省して、本屋に詩集などを買いに行ったら、文化大革命中の中国の本屋としては非常

に珍しく、入口のところに本が山と置かれているんです。この本は『毛沢東全集』ではなくて、普通の本のようにでした。おもしろ半分は何の本だろうと手に取ってみたのが、私と日本のつき合いの始まりとなったんです。

これは上海で初めて設けられた日本語のラジオ講座のテキストだったのですが、それを開けてみると、言葉は当時の文化大革命の色彩が大分残っていて、「赤旗」とか「プロレタリア階級」とかの単語があったのですが、例えばその「赤旗」を見ると非常に発音が単

調ではないかと感じました。詩を書いていた人間ですから、中国詩は韻を踏まなければならぬ。ところが、母音などがこんなに単調な言葉を、日本人はどのように使って愛を語り合い、あるいは悲しみを分かち合うのか。そういういわば文学少年的にいろいろ考えておもしろ半分に。そして、私は上海出身ですから、上海人のしたたかさも出てきて、将来年をとってしまつたら、詩を書けなくなつてしまふんじゃないか。あれは若いころの感性で書けるようなことですから、ひとつ外国語でも勉強しておこうかなと思つた。英語は勉強している人が多いので、スタートしたばかりの日本語教育にあやかるう。それで日本語を勉強し始めたのです。

実際に、うちの母がものすごく反対だったので。なぜ今まで書いてきた詩を書かなくなつてしまつたのか。外国語を勉強したいのなら英語でも勉強しなさい。なぜ東洋話トヤンを勉強するのか、これは日本語を見下

げたような中国の言い方ですけれども母が言ったのですが、当時の私の気持ちは、日本語を勉強することと昔の戦争とは別に関係ないではないか、これから中国もどんどん発展するではないか。そうすると外国語の人材が重要視されることになる。まだあまりみんなが勉強していない日本語を私が先に勉強すれば、逆に後で私の利用価値が高められるのではないかと、親のいうことを全然聞かずにひたすら自分で勉強して、大学に行つて、やがて大学を出て、文革も終わつて、大学に残つたのですが、それで日本文学などを紹介し始めて、やがて改革開放が始まつたのです。

### 改革開放と日本映画

それで中国の改革開放となると、実は日本の文化と本当に切り離せない関係にあるのです。改革開放は今になってみんないろいろ経済的なメリットが見えて

きて、改革開放がいいとかいつているのですが、当初は先ほど田畑先生のおっしゃったように、改革開放のよさがどこにあるのか、みんなわからない。三人の仕事をする五人でやっているのが、なぜ悪いのかという発想だったのです。しかし、改革開放が中国国民にもたらした最初のいいところは、外国の映画が見られるようになったことで、それは日本の映画だったんです。中国で行われた最初の映画週間が、日本の映画の週間だったんです。それまで中国人が見た外国の映画というと、ソ連の映画あるいはアルバニアの映画、いわゆる社会主義系の映画でした。そこで、初めて西側の国の映画が中国でじかに見られるようになって、みんな感激してしまっただけです。日本の皆さんは覚えていらっしゃるかどうかわからないのですが、「君よ！ 憤怒の河を渉れ」とか栗原小巻さんの「サンダカン八番娼館 望郷」とか「愛と死」とか、そして後ほどの日本のテレビドラマ「赤い疑惑」、山口百恵さんが主演

したテレビドラマですが、そういうのが全部、中国の国民にとっては外国の現状の教育テキストみたいなものになったのです。みんなそれを見て、日本はこんなにすばらしい国だったのだと、そういうふうに日本を再認識したのです。

□ではみんな言っていないのですけれども、あるいは文章にははつきりと書かれていないのですが、当時の中国の国民にとっては、改革開放はあるいは改革開放の将来は、イコール今の日本だという認識だったのです。ですから当時日本の方々が中国に行くと、盛大な歓迎を受けられたのは、政府の指図でそういうふうにしろという一面もあるのですけれども、中国の国民も心の中から、日本人はすなわちあしたの私たちだ、こういう日本人とつき合えば、いろいろなことを吸収できるではないかという気持ちがかんがえられたのです。

## 改革開放の成果とは

しかし、残念ながら二十五年たつて、日中関係はどうなっているのか。私のレジュメにも書いてあるように、詳しくはいわなくてもいいと思いますが、互いに相手に対する好感度はこの二十五年を通して見ると、一番低いところに落ち込んでしまいました。では、その二十五年間にどういう成果が得られたのかといえば、私は、その二十五年間で中国の国民にとつても、日本の国民にとつても、互いに相手の実態がわかってきたことだと思います。始めのころの日本に対しての好感は、ある意味では距離があつたからこそできた好感です。映画のスクリーン、テレビのブラウン管を通して得た情報で描いた日本と日本人像、それによつて築かれた好感でした。しかし、実際に一九八〇年代の半ばごろからは、大量に中国人が日本にやってきました、中曽根首相の十万人留学生の受け入れ計画

によつてです。

その受け入れ計画とはどういうものなのか。アメリカ留学の場合は、トーフルというハードルがあるんです。これを飛び越えないとアメリカ留学はできないんです。しかし、実際に日本に来た中国人はどういう中国人たちなのかというと、同胞を批判するのは私もうらいですけども、当時の中国ではむしろ大学生などはなるべく出したくなかつたのです。大学生数が絶対的に少なかつたわけですから、国を発展させるためにはなるべく大学を出て五年間出国を認められない。そうすると、だれが出国できたのかといいますと、当時は中国の国営企業の中で、管理者がこいつは厄介者だ、本当は首にしたいのだけれども、社会主義国家ですから首にすることはできない。そうするとこういう厄介者が日本に留学したいというと、もうさつさと留学許可に印鑑を押して、どうぞどうぞというわけで。実際、国営企業も改革時代に入つてから余剰人員を抱えて、

人減らしをしたかったんです。かといって、国の政策ではそれはできない。そうすると、自分たちで日本に行きたいというなら、どうぞどうぞとむしろ歓迎しています。

結局、彼らが日本に来て、日本の技術などを勉強するのではなくて、出稼ぎという意識が非常に強かったのです。そして、彼らを受け入れる日本の環境も非常に悪かった。彼らを産業労働力として使った。日本の経済がちょうどバブル時期で人手が足りなかつたわけです。どんどん工事現場などに行かせて、確かに金はかせいだのですけれども、残念ながら彼らが見た日本は、むしろ日本の恥部に近いような日本像だと私は思います。その彼らが後に日本を出て中国に戻って、いろいろ日本のことも書きます。例えば、上海でベストセラーになった『東京の上海人』という本があります。テレビドラマにもなりました。そこから見た日本は、多分日本の皆さん方がそのテレビドラマを見たり、

その本を読んだらこう思うはずですが、日本はそんなはずではないと反論したくなります。では、彼らうそを書いているのか。うそでもないのです。これは日本の本当のことです。しかし、極端になりすぎたのです。

そういうことで、私はやはりこの二十五年間の問題を一度丁寧に点検しないといけないと思います。もし、そのままやっていると、あと二十五年間たつても結局同じ問題が繰り返されるだけです。やはり、ひとつ国民根幹型の交流が必要だった。そして、交流は形ではなくて、質も求めるべきだ。別にエリートなどと呼んでやるのではなくて、本当の意味での国民レベルの各分野にわたつての、いわゆる心からの交流が必要です。形ではなく、呼んできて、食事に招待して、子々孫々まで友好だというだけでは、これは全然友好になりません。

最近、私は『ノーと言える中国』という本を日本語に訳したのですが、この本ははつきりいって日本をか

なり厳しく批判しています。しかも、その中には事実を誤解して、批判しているところもあるんです。では、なぜ私がそんな本を訳したのかといえますと、著者の年齢は全部三十代です。すなわち改革開放時代に入ったときに、彼らはちょうど社会人になったのです。中国人の中で、彼らはむしろ西側の文化を最も満喫した人種で、しかも最も日本文化、アメリカ文化に心酔していた人たちです。しかし、こういう人たちが今になって、なぜ日本などを強烈に批判するようになったのか、を日本の皆さんに知ってもらい、考えてほしかったからです。本来はこういう本は、ある意味ではむしろ私が書くべきです。私は紅衛兵時代の人間で、毛沢東思想をもっとたくさん受けてきた人間ですから。こういう本を書いてもおかしくないじゃないかと、自分でも思います。

でも、なぜ書かなかったかと言いますと、私たちの年代は、日本を見るときに、昔から距離感を置いてお

り、冷静に見ることができたのです。今の三十代の人たち、あるいはそれ以降の人たちは、むしろ日本に心酔していた。アメリカに心酔していた。ほれていたのです。そして後になって、いろいろがっかりしてしまっ  
て、見捨てられてしまった、裏切られたという気持ちが非常に強かったのです。そういう気持ちがまた激しい感情としてあらわれてきて、『ノーと言える中国』  
というような本を書いてしまったのです。